

便利な道具「比較」

監修

藤森裕治

お出かけの服選びから進路選択まで、私たちの生活の中では複数の候補から最適なものを選ぶ必要に迫られる場面がたくさんあります。そのとき、私たちが必ずといってよいほど行う思考が「比較」です。比較することによってそれぞれの共通点や相違点、長所や短所を見出し、納得のいく結論を導きます。今回は山崎正和「水の東西」を素材に、身近な話題を用いた発表に挑戦しながら、「比較」という便利な道具を使いこなす技法を学びます。

学習のポイント

- ① 筆者は世界をどう見ているか
- ② 二項対立で比べてみよう
- ③ 比較のメリット・デメリット

チャレンジ：Tチャートを使って筆者の思考をとらえよう

山崎正和「水の東西」は、日本の伝統文化である「鹿おどし」を手がかりに、「水」への美的感覚に対する日本文化と西洋文化との違いについて思索した文章です。番組では、筆者が日本の「鹿おどし」と西洋の「噴水」とを比較し、「鹿おどし」に埋め込まれた日本人の感性に気づくまでのプロセスを、視覚的に整理します。ここで使われる思考ツールが、Tチャートです。Tチャートでは、①比較する話題（トピック）を決め、②観点を立てながらそれぞれの特徴や具体例を対比し、③分かったことをまとめるまでの流れを視覚化していきます。具体的な仕組みや使い方などは、番組を通して理解して下さい。

ステップアップ：高校に通うときの服装はどうあるべきか

Tチャートを使った比較の技法を理解したところで、生徒役の二人はみなさんにも身近な話題で「比較」を行います。現在、日本には制服が指定されている高校と私服で通学することが認められている高校とが混在しています。制服と私服、この二つの長所短所をTチャートで比べながら、高校に通うときの服装はどうあるべきかを考えます。比較するための観点としては、例えば、かかる費用、個性の有無、支度にかかる時間、校則との関係などがありますね。生徒役のいおりさんとしゅうせいさんは、これらの観点から見えてくる制服と私服それぞれの特徴について、協力しながらTチャートに整理し、その上で自分の結論を発表します。どんな結論が導かれるでしょうか。

対照的な二つのことから比較する思考のあり方を「二項対立」といいます。考えを深めたり、よりよい結論を発見したりするのに役立つ思考です。しかしながら、二項対立をはじめとする「比較」には、思わぬ副作用があることにも気をつけましょう。それは、ついどちらを選ぶべきか、どちらが良いか・悪いかといった発想に陥りやすいという副作用です。また、世の中には「比較」という道具で考えるのになじまないことがらも少なくありません。愛情や努力など、本来比べるべきではないことがらを「比較」しがちなのが私たちの悪いクセです。こうした点についても番組では掘り下げたいと思います。

エッセイ

比較の糸を織りなす

藤森裕治

実社会を生きたとき、私たちはさまざまな場面で比較を行っている。「今日のお昼はラーメンにしようかカレーにしようか」といったささやかな問題から、「A社とB社のどちらに就職すべきか」といった人生設計にかかわる大問題まで、ものごとを比べる必要に迫られる場面は、数え切れないほどある。比較することによって分かるのは、比べたものごとの詳しい内容、それぞれの共通点や相違点、そして新しいものの方・考え方である。

例えば近頃話題になっている「校則」。靴下の色や髪型など、とかく没個性的で抑圧的だと批判される学校の決まりだが、世界各国の「校則」と比較してみると、面白い情報が手に入る。私が実際に現地で聞いたものと二宮皓監修『こんなに厳しい！世界の校則』（メディアファクトリー、二〇一一年）から、三つ紹介してみよう。

- ・ 予防接種を受けた証明書がなければ学校に入ることはいできない。（アメリカ）
- ・ 児童の登下校は保護者またはその代理人が送迎しなければならない。（イギリス）
- ・ 休日に宿題をしてはならない。（ドイツ）

これらに共通する目的は、「学校と家庭とがそれぞれ負う責任をはっきりさせること」である。アメリカとイギリスの例は読んで字のごとくだが、ドイツの校則は不思議に思うかもしれない。これは、ドイツ憲法基本法第六条にある「子どもの教育は保護者が本来的に持つ権利であり義務である」という規定を尊重したものだと考えられている。つまり、学校での学びを家庭に持ち越すことに制限を加えているわけだ。

このように、西洋諸国では、概して子どもの教育に対する家庭と学校との役割分担が厳密に線引きされており、学校側が学校外の生活にあれこれと介入しないことが原則となっている。日本の校則はどうだろうか？このような問いを契機に、日常当たり前だと考えていた事柄を新たな視点で見つめ直すことが、比較の醍醐味である。

校則の国際比較のように、同じ時間や空間の中にあるものごとを取り出し、比べてみる作業を「横の比較」と呼ぼう。これに対して、私たちにはもう一つの比較の仕方がある。それは、ものごとの過去と現在とを比べてみるという方法だ。例えば、部活のOBが母校を訪問して、後輩たちの様子を眺めながら「自分たちのときはこうだった」と回想するとき（大抵、自分たちの時代の方を礼賛する）、あるいは小学校時代に書いた作文を読み返して、現在の自分がどう成長しているかをたしかめるとき（案外、字体はそれほど変わっていない）などに行われる比較である。このような作業を「縦の比較」と呼ぼう。

このところ、いろいろなところで他の人間と比べることをつつしむ声を聞く。「ナンバーワンでなくオンリーワン」というかけ声もその一つだ。私は、大いに他の人間と「横の比較」を行ってみるべきだと考えている。ただし、それだけでは優越感や劣等感を助長しかねないし、自分の立ち位置が定まらない。そこで大切なのが「縦の比較」である。周囲の人と自分とを比べたら、今度は過去の自分と現在の自分とを比べ

エッセイ

てみる。この、横と縦との交わるところに、本当の自分の姿があると考えている。
中島みゆきの名曲「糸」は、巡り会う男女を経（たて）の糸と緯（よこ）の糸にたとえたラブソングである。この歌を口ずさむたび、これは自分を愛することができ人間になりなさいという賛歌なのだと感じることがある。
比較の糸を織りなす。試しにやってみるとよい。存外、自分は捨てた者じゃないと実感するはずだ。